

であった。死亡者はいずれも0であった。近年の減少傾向の主な要因としては、1. 住居環境の整備、2. 農地改良事業によるハブ生息場所の減

少、3. 縣市町村によるハブ対策事業の強化などが考えられる。

## 昭和58年度沖縄はぶトキソイド研究報告書

酵素免疫測定法 (ELISA) によるハブ毒定量の試み (予報) p. 3—9.

野崎真敏、富原靖博、国吉元、山川雅延

ハブ咬症時の血中や組織中の残留毒素量の測定法の確立を目的に酵素免疫測定により沖縄ハブ粗毒並びに同精製毒の定量実験を試みた。その結果

1 ハブ粗毒及び HR-1 の酵素免疫測定法による定量可能域は5~30 ng だった。

2 HR-2 では5~300 ng の広い範囲で定量が可能であったが、用量-反応曲線のスロープが低く、粗毒、HR-1 に比べて測定感度が悪かった。

## 沖縄特殊有害動物駆除対策基本調査報告書 (VII)

防蛇壁開口部の構造の工夫 p. 1—5

西村昌彦、山城 武

防蛇壁が道路などと交わる部分にできる開口部からのハブの出入を減少させる工夫をした。ハブ支所の実験場内の柵の一部を開け、中にハブを放して脱出の有無を調べたところ、開口部の両側を網製のトラップ状にすればよいことがわかった。なお、この網製のトラップは、防蛇壁の途中にも造ることができる。これで、もっとも経費のかからないナイロン網製の防蛇壁はほぼ完成した。

ブロックおよび金属壁の防蛇効果の実験 p. 7—11

西村昌彦

ハブ支所の実験場内で、ブロックおよび金属製網の柵を造り、中にハブを入れて乗り越えの有無を調べた。ブロックは、20 cm のかえし付きでは4段 (80 cm 高)、かえしなしでは5段 (1 m 高) で大部分のハブの侵入を防ぐことができる。実験に用いた金属壁 (70 cm 高、15 cm のかえし付き) からは、一部のハブが脱出したことから、高さを1 m、かえしを30 cm にした方がよい。

防蛇壁構築の経費及び注意点 p. 13—16

西村昌彦

ハブの侵入を防ぐ対象となる地域の大きさに応じて、もっとも安価なナイロン製網の防蛇壁か

ら、もっとも高価な金属製の防蛇壁について、構造、経費、建設、維持管理の注意点などをあげた。いずれの構造のものを作るにしろ、もっとも大切なことは建築後の維持管理である。ナイロン網製のものは、やや耐久性に欠けようが、防蛇効果は最良であり、かつトラップを並設すれば、ハブの捕獲も可能である。

疑似餌の開発 p. 17—20

新城安哲

ハブ疑似餌として4種類の人工餌をハブに与えた。マウスギジエ (マウスの筋肉を布地でつむ) は、5匹中3匹が食べ、スポンジをモヘアで包んだ1種は5匹中2匹が食べた。スポンジ、モヘアの1種とスポンジに臭いをつけた餌は食べられなかった。

室内実験ボックスを用いた忌避効果判定法

p. 23—29

城間 侔

夜間活動する所と、昼間隠れる暗い所を備えた室内実験ボックスを用い、ハブの昼間の隠れ場の選択を通じ、忌避効果の判定を行った。硫黄粉末と半焼、10%フォルマリン、ガソリン、ネオシュエーレスにはまったく忌避効果が認められなかった。シンナーには、ハブに対する明白な忌避作用